人文・自然・人間科学研究　No. 51, pp. 95-108　　March 2024

ヒンドゥー教のバーガヴァタ・カター

── 北インドのチャイタニヤ派寺院のゴースワーミー師の事例から ──

澤　田　彰　宏

Bhabavata Katha of Hinduism:

A Case Study from Practice of Goswami of A Chaitanya Temple in Vrindavan, North India

Akihiro SAWADA

要　旨

インドのヒンドゥー教の語り芸であり法話でもあるバーガヴァタ・カターは現在多くのブラーフマン（バラモン）司祭によってインド国内外で行われている。本稿ではクリシュナ神の聖地ヴリンダーヴァンにあるチャイタニヤ派ラーダーラマン寺院のブラーフマン司祭であるゴースワーミー師によるこのカターの実践について，その社会的な側面を現地調査で得られた資料によって明らかにすることを目的とする。

バーガヴァタ・カターは，サンスクリット語の古典文献に基づいたクリシュナ神話を司祭が物語る信仰を広めるための実践であり，特定の会場に聴衆を集めて７日間連続で行われる。同時に聴衆にとっては宗教的な芸能でもある。

バーガヴァタ・カターの聴衆の中心となっているのは語り手である司祭の弟子あるいは支援者である富裕層が多く，彼らは司祭に喜捨として高額の金銭を定期的に渡し，司祭の生活と活動を支える存在でもある。

語り手の司祭にとって，バーガヴァタ・カターの実践は，自らが奉ずる神の信仰の教化，各地に住む自分の弟子との交流の機会，そして寺院外からの収入を得るための重要な機会でもある。

キーワード：バーガヴァタ・カター，ヒンドゥー教，インド，ヴリンダーヴァン，チャイタニヤ派

は じ め に

インド文化には「カター kathā」と呼ばれる語り物あるいは語り芸の伝統がある。この語はまず「話，説話，伝説」などを意味するが，宗教的な語り物（縁起譚）を人々に聞かせるある種の儀礼・行事をも指す。インドにおいてカターは広く民衆の間に行われているが，ヒンドゥー教のブラーフマン（brāhmaṇa ブラーフマナ，日本語ではバラ

モン，以下ブラーフマンで統一）司祭もその信徒に対して寺院の内外で実践している。後述するようにブラーフマン司祭によるカターの種類はその原典によって複数あるが，サンスクリット語テクストの『バーガヴァタ・プラーナ』*Bhāgavata Purāṇa* に基づくバーガヴァタ・カター Bhāgavata Kathāと呼ばれるものが現在最も多く実践されていると思われる。

本稿では，ヒンドゥー教クリシュナ神（Kṛṣṇa, 以下クリシュナと表記）の聖地である北インドのヴリンダーヴァン Vrindāvana（ブリンダーバン Brindābana とも）という町に所在するラーダーラマン Rādhāramaṇa 寺院のブラーフマン司祭によるバーガヴァタ・カターの事例を取り上げ，ある種の宗教儀礼でもあるこのカターの実践について，特にその社会的側面を明らかにすることを目的とする。バーガヴァタ・カターのテクスト面つまり語りの内容も当然重要であるが，この点については別稿を期したい。

インド学における『バーガヴァタ・プラーナ』についての研究や，ヴリンダーヴァンを含めたブラジュ地方の中世以降のヒンドゥー教文化，特にバクティ文学の研究はこれまで盛んになされてきた。そして宗教実践では，ブラーフマンならば寺院での，民衆ならば家庭での，さまざまな儀礼や祭りの研究も宗教学や人類学などで豊富になされてきた。

しかしながら，上記のどの点とも関係する現在のバーガヴァタ・カターを取り上げた研究はこれまでのところ筆者は未見である。

本稿でもたびたび参照するマーガレット・ケースとジョン・ストラットン・ホーレイがそれぞれの研究の中でブラーフマン司祭の生活史での一つのトピックとして挙げているが，やはりバーガヴァタ・カターそのものを掘り下げることはしていない。

このような理由から，筆者はバーガヴァタ・カターに代表されるカターの実践について，現在のヒンドゥー教社会におけるその重要性を明らかにすることが必要であると考える。

筆者は 2019 年の 2 月 18 日から 3 月 3 日まで，そして同年 8 月 12 日から 30 日までの 2 回ラーダーラマン寺院の現地調査を行い，その成果として同時院の運営および同時院のブラーフマン司祭であるゴースワーミー師 Goswāmī たちの活動についての全体像を提示する試みを澤田（2020）にて報告した。この 2019 年 2 月の調査中に筆者は同寺院のひとりのゴースワーミー師のバーガヴァタ・カターに一時的ながら触れる機会を得て，初めてこの催しの存在を知った。

その後の新型コロナウィルス流行のため現地調査は中断を余儀なくされたが，2023 年 2 月 6 日から 20 日のヴリンダーヴァン再訪の際に，同じゴースワーミー師によるバーガヴァタ・カターに 7 日間の全日程（2 月 8 日から 14 日まで）参加することができた。同時にカターの聴衆となった参加者の数人に話を聞くこともできた。本稿では 2019 年

8月および2023年2月にヴリンダーヴァンで実施した現地調査での観察や聞き取りで得られた情報を主な資料とする。

1　バーガヴァタ・カター概観

1-1　バーガヴァタ・カターの語について

まずバーガヴァタ・カターという語について，本稿の調査地ヴリンダーヴァンを含む北インドで広く話されているヒンディー語の辞典から見てみたい。

バーガヴァタ Bhāgavata（これはヒンドゥー教文化の主要言語であるサンスクリット語の発音であり，本稿ではこれを用いる。ヒンディー語の発音ではバーグヴァトとなる）という語は，形容詞で「ヴィシュヌ神の，ヴィシュヌ派の」，男性名詞で「バーガヴァタ・プラーナ」を意味する（古賀・高橋 2006：1004）。ヴィシュヌ神はヒンドゥー教の二大神格のひとつとされる男性神である。バーガヴァタ・プラーナについては後述する。

カター kathā という語は，女性名詞で「話，語り伝え，説話，伝説，ヒンドゥー教の叙事詩の物語や教典に語られた話，祝い事や祈願などの宗教的動機や宗教儀礼の中で語られ聴聞される語り物…」などを意味する（古賀・高橋 2006：188-189）。

1-2　語り芸としてのカター

現在でも語り芸[1] はインドの民衆芸能の中に多数あるが，宗教的説法や儀礼の背景を語るものとしての縁起譚（カター）に起源するものが多い（小西・井上 2012：158-159）。バーガヴァタ・カターのみならず各種のサンスクリット語文献に取材したカターの催しは，楽器による伴奏（バジャン bhajana, キールタン kīrtana）もある宗教的語りの儀礼・行事となっている。伴奏は寺院での奉納讃歌（これもバジャン，キールタン）などと共通と考えられる。本稿で扱うカターでは，ブラーフマン司祭を語り手として聴衆に対する宗教的な語りが実践の中心である。音楽は必要不可欠だがあくまで伴奏という位置づけになっている。

カターの題材となるものは宗教（通常はヒンドゥー教）的縁起譚であることから，カターは「法話」（仏法に関する話，説教），「講話」（ある題目について集まった多くの人にわかりやすく説き聞かすこと），“discourse”（講演，講話，説教）などと訳される[2]。

宗教儀礼では，本来ヴラタ vrata（ヒンディー語ではヴラット）という主に女性による家庭内での儀礼や誓願行為とカターが対になることが多く，その際に語られるヴラタ・カター vrata kathā と呼ばれるものもある[3]。

1-3　カターの語り手

ヒンディー語辞典をみると，カターの語り手としては次の 2 語が相当すると考えられる。

ひとつは「カターヴァーチャク kathāvācaka」。男性名詞で「物語師，説話師，説教師（バーガヴァタ・プラーナなどのヒンドゥー教の神話や聖典視される叙事詩の物語を語り解くことを生業とする）」（古賀・高橋 2006：189）。もうひとつは「ヴヤース vyāsa」。男性名詞で「カターヴァーチャクと呼ばれるバラモンで叙事詩や経典中の物語を用いて説法を行う説法師や説教師）」（古賀・高橋 2006：1252，一部を筆者修正）。前者がより一般的であろう。

筆者が調査した以外のものも含めて，ヴリンダーヴァンでのカターの語り手は主にブラーフマンであるが，現在カターを実践する人々全てがヒンドゥー寺院に属する司祭かどうかは不明である。また現在では男性ではなく，女性の語り手も現れているという（Hawley 2020：212）。

カターの語り手は単独であることが通常である。音楽はあくまで伴奏であることから，語りの技能も聴衆を引き付けるために重要になる。例えば，抑揚をつけた語りやたびたび入るカターの語り手自身による歌唱などは，語り手の技術・力量が如実に表れる場面である。

筆者が参加した 2 回のカターでの語り手は，ラーダーラマン寺院のブラーフマン司祭の V 師であった。つまり彼の本来の「職業」は，寺院の本尊であるクリシュナ（ラーダーラマン）神像に仕えてその儀礼（セーワー sewā という）を行うことである【写真 1】。

写真 1　ラーダーラマン寺院の内陣，中央奥にラーダーラマン神が祀られている（筆者撮影，2023 年 2 月 16 日）

ただし，この寺院での儀礼の担当は輪番制という特殊な方法を取っているため，その日程は約 2 年半に一度数日から数週間という短い期間のみである。そのため，ときに遠方に赴き毎回 7 日間の日程で開催される（後述）バーガヴァタ・カターを実施することも容易である。

なお，伴奏の音楽家（ハルモニウム，タブラー，バーンスリー／シャナーイー，パカーワジなど）は，2023 年 2 月調査時のカターでは，カター伴奏専門のバンドではなく，単独でプロとして活動をしている人たちが 1 週間のカターのために V 師より依頼を受けて集まってきていた。

1-4　カターの原典

上述のようにバーガヴァタ・カターの語りの原典となっているのは『バーガヴァタ・プラーナ』である。これはヒンドゥー教ヴィシュヌ派の一派バーガヴァタ派の聖典であり，その記述言語はサンスクリット語である。ヒンドゥー教の古典文献の一種であるプラーナ Purāṇa（古譚の意）は数多くつくられたが，そのうちの 18 プラーナがマハープラーナ（Mahāpurāṇa, 大古譚の意）とされている。『バーガヴァタ・プラーナ』もマハープラーナの 1 つであり，この中では最も新しいが，同時に最も普及し信仰を集めている。『バーガヴァタ・プラーナ』はヴィシュヌ派内で『バガヴァッドギーター』*Bhagavadgītā* ともに根本聖典となっていて（上村 2003：256），ここにはクリシュナの誕生から青年時代，多くの羅刹退治，クリシュナの王国，そして死までの一生が物語られている。10 世紀頃南インドで成立し，12 巻約 18000 の詩節からなる。その第 10 巻でヴィシュヌ神の化身としてのクリシュナと牛飼い女（ゴーピー）との愛が詳細に描かれていて，宗派を超えたクリシュナ信仰の全インドへの拡大に大きな影響力をもった（田中 2012：598, 一部筆者修正）[(4)]。

『バーガヴァタ・プラーナ』以外にカターの原典となっている作品ではやはりサンスクリット語の『ギータ・ゴーヴィンダ』*Gītagovīnda*（小倉 2000：119）[(5)]，『ラーマーヤナ』*Rāmāyaṇa* などヴィシュヌ派のものが多くみられる。シヴァ派の人々の間では『シヴァ・プラーナ』のシヴァ（シヴ）・カター Śiva kathā が行われている（S 師のインタビューより，2023 年 2 月 17 日）。

カターの語り手は，聴衆にプラーナや叙事詩などを語りながら，その内容（神の行為や言葉など）を語り手自身の言葉で解説し，時に聴衆に問いかけるようにして宗教（ヒンドゥー教）的な道徳・倫理をも同時に説いている。法話や講話と和訳されるのはこのためであろう。

1-5　カターの場

カターが行われる場はさまざまである。ヒンドゥー寺院はもちろん，信徒の邸宅，ホテルなど大きな建物のホール，広場などが多いが，巡礼中の人々が宿泊する野営所でも行われることがある。

カターの語り手が単独で会場前方中央の演台に着座して行う[(6)]。その横に伴奏の楽器の演奏者たちが座り，聴衆は演者に向かい合って座る【写真 2】。

ラーダーラマン寺院のゴースワーミー師の場合では，ヴリンダーヴァンでもカターは行われるが，師が招かれて北インドを中心にインド各地に出向くことの方が多いようだ。カターを主催する人物がその会場を設けて，語り手となるゴースワーミー師を招いて開催する。一般に開催のための費用の全ては主催者が負担する。たとえ会場が高級ホテルだとしても同様である。そのため主催者は師の目の前の特等席に着座し，カターに伴う礼拝儀礼などでは聴衆の中で最初に行う。礼拝儀礼全体はカターの語り手とは別の，儀礼専門のブラーフマン（パンディット paṇḍiṭa）が主導して行われる。

写真 2　V 師（中央奥）のバーガヴァタ・カターの開始時の様子。右奥に楽器演奏者が座っている。（筆者撮影，2023 年 2 月 9 日）

1-6　カターの行われる機会と時間

カターは宗教的実践でもあることから，何かしら吉祥な日が選ばれると推測される。例えば，筆者が 2021 年に参加したものは，その語り手のゴースワーミー師の著名だっ

た父（故人）の生誕日を祝い，その日に合わせて開催されていた。他には巡礼の期間中であれば毎夕・晩に行われる（坂田 他 1989：70）。ヴリンダーヴァンではカターが開催される告知（ポスター広告）が町の中で事前に数多く張り出されていた。

各種のカターをみるとその開催期間は1日から数日間と幅があるようだが，バーガヴァタ・カターであれば連続7日間で行われることになっている。そのため「バーガヴァタ・サプターフ」Bhāgavata Saptāha（バーガヴァタ・カターの7日）とも呼ばれる。時間帯は午前中にその日のカターが始まり，昼に休憩を挟んで夕から夜まで続く。決まった制限時間があるわけではないので，1日中になることも珍しくない。筆者が参加した2回のカターでは毎日食事が会場横の部屋で準備され，参加者は給仕を受けていた。

1-7　カターの聴衆

筆者が参加した2回のバーガヴァタ・カターでは，どちらも語り手のブラーフマン司祭の弟子やラーダーラマン寺院の信徒といえる特定の人々を聴衆としていた。これは主催者が金銭面も含めて準備し，語り手を招いて開催しているのだから当然ともいえる。ただし，それらの信徒に連れられたこの先新たに弟子となりそうな人々も参加者に含むものと思われる。聴衆の人数は会によってさまざまで，わずか数十人のときもあれば数百人に上るときもある。

カターの聴衆は開始前や終了後に演台に座るゴースワーミー師の元に歩み寄り喜捨をして，祝福を受ける。主催者が常に一番先に進み出るが，全員がその機会を得ることができる。筆者のような非ヒンドゥー教徒の外国人でも受け入れている【写真3】。

写真3　1日のバーガヴァタ・カターの終了後にV師に拝する参加者の様子（筆者撮影，2023年2月11日）

カターが始まり時間が経ち聴衆も興が乗ってくると，自分から声をあげたり語り手の手ぶりをまねたり，拍手をしたり，歌ったり，時には立ち上がって踊ったりなどの反応を示す。

2　チャイタニヤ派ラーダーラマン寺院のゴースワーミー師とその弟子

2-1　チャイタニヤ派とラーダーラマン寺院

ヒンドゥー教チャイタニヤ派（ガウリーヤ・ヴィシュヌ派とも）の開祖チャイタニヤ（Caitanya, 1485-1533 ころ）は，現在の東インド・ベンガル地方のナヴァドゥヴィーパ（ノボディプ）出身のヴィシュヌ派のブラーフマンである。チャイタニヤは元来学僧で『バーガヴァタ・プラーナ』を教えていたが，しだいに賛歌を合唱しながら楽器を鳴らして歌い踊る詠歌行進を行って，牛飼いとして地上に顕現したクリシュナとその恋人の牧女ラーダー（Rādhā）を熱狂的に崇拝する宗教運動（クリシュナへのバクティ信仰）を起こした。その影響はベンガルやオリッサなど東インドだけでなく，北インドや西インドにも広く及び，現在でも多数の信徒がいる。

ラーダーラマン寺院は，神話上クリシュナが少年・青年期を過ごしたとされる北インドのブラジュ地方のヴリンダーヴァンに所在するチャイタニヤ派の大寺院で，この町のチャイタニヤ派七寺院と呼ばれるもののひとつである。チャイタニヤの直弟子の一人ゴーパール・バット・ゴースワーミー Gopāla Bhaṭṭa Goswāmī（1500-86 頃）により開かれたとされ，創建は 1542 年だという（Hawley 2020：219）。

2-2　ゴースワーミー師

ゴースワーミー師はラーダーラマン寺院でアーチャーリヤ（ācārya, 学匠，師，祭式・儀式を司る祭官）として儀礼執行と寺院運営の任にあるブラーフマンの家系の男性である。現地ではゴースワーミー師を尊称でマハーラージ Mahārāja（大王の意，したがって本来はブラーフマンにではなく，クシャトリヤ・ヴァルナについて使用されるもの）と呼ぶ，あるいは名の後に付けて呼んでいる。

ラーダーラマン寺院の司祭は輪番制をとっていて，ゴースワーミー師の「40 家」の家族は 5 つのサブ・リネージに分かれていて，各家の男性が順に寺院の本尊であるクリシュナ（ラーダーラマン）への儀礼を担当している。各々の輪番は約 2 年半に一度やってきて，その期間は数日から数週間と個人差がある。

「40 家」の家族は互いに親族であると認識していて，全員が同じゴースワーミー姓をもっている。彼らは現世放棄者（出家者）ではなく，在家のままほとんどが家庭を持ち，世俗の生活をおくりながら司祭職を務めている。現在でもラーダーラマン寺院がある囲

い（ゲーラー gherā）の中や寺院のそばに住んでいる家族も多くいるが，ヴリンダーヴァンの外に住む者もいる。そういうゴースワーミー師は自分の儀礼の輪番のときのみヴリンダーヴァンにやって来る（Case 2000：77）。

2019 年の 2 回の調査での協力者の S 師は，現在ラーダーラマン寺院の司祭であると同時に寺院運営のための組織（同寺院ではパンチャーヤト pañcāyata と呼ばれる）にも関わる，ヴリンダーヴァンの町全体でも著名な人物である。S 師はやはり著名な師だった父 P 師（故人）の長男で，現在は息子が 2 人いる。なおゴースワーミー師の司祭職は世襲で，父系血族の男子のみに継承が許されている。もし師の夫婦に男子が生まれなければ，養子をとって継がせることもできない（澤田 2020：110，および Hawley 2020：212）。

この S 師の 10 歳違いの弟が V 師である。 V 師も同時院で輪番の司祭職を務め，カターを独自に行っている。なお V 師は独身ではあるが出家者（サンニャースィン）ではない。世俗を捨てた出家者はラーダーラマン寺院では司祭になることはできない（澤田 2020：111）。

各々ゴースワーミー師がいつカターを始めるのかについては，年齢などの決まりが特にあるわけではない。各々の「インスピレーション」やカターができるようになったとき（実践するにはその準備として勉強と鍛練が必要なため）に始めるものらしい。また V 師は自分のバーガヴァタ・カターを始める前に，著名なインド古典音楽声楽家であるジャスラージ（Jasarāja）師に歌唱を習ったという（S 師へのインタビュー，2023 年 2 月 17 日）。

加えて自分の聴衆となるだけの一定数の人々（弟子など）がいるという条件も当然あると考えられる。

ゴースワーミー師がカターを行うための各地への旅は，語り手ひとりだけのものではなく，伴奏する音楽家，演台や会場を設営・管理する裏方の人たちも移動する一団となる（宿泊する所や道中の食事の準備も重要）。その際，一般的にはゴースワーミー師の妻が計画・準備の中心を担う（Case 2000：50）。ゴースワーミー師を招く主催者との連絡を主にとるのも妻だと考えられる。

2-3　ゴースワーミー師によるカターと弟子

ラーダーラマン寺院のゴースワーミー師では弟子（宗教者ではない世俗の仕事をしている人々）を持つ師がカターを行っていて，弟子を持たない師は行わない（澤田 2020：116）。ただしカターを行うことが禁止されているわけではない（S 師へのインタビュー 2023 年 2 月 17 日）。

ゴースワーミー師たちは北インド各地の町と密接な関係があり，それらの町には師の

支援者（followers）によって建てられた「ラーダーラマン寺院」や，または弟子たちのコミュニティが存在する町もあるという（Case 2000：77）。ラーダーラマン寺院の別のゴースワーミー師であるP師には，インド国内におよそ2000人の弟子がいて，国外の15か国でカターを実施した経験があるという[7]（澤田2020：116および119-120）。これらの弟子がカターの主催者となることがほとんどであろう。ただしS師の父P師の事例では，自分の弟子ではなくても，直接乞われれば出向くこともあるようだ（Case 2000：24-26）。

カターが重要なのは宗教的行事である法話のみにとどまらない。カターの期間中はゴースワーミー師とインド各地に住む弟子が直接会う機会となっていて，その際に師は弟子の世俗・宗教的を問わず悩みを聞き，アドヴァイスを与えるという（澤田2020：117）。

ラーダーラマン寺院のゴースワーミー師の司祭としての収入は，輪番の儀礼担当のときに得られる参拝者からのダーン（dāna喜捨，布施）のみで，そしてそれは現在約2年半に一度の数日から数十日の期間なのである（澤田2020：112および116）。そのため個人の寺院や不動産などの財産を持たないゴースワーミー師にとっては，儀礼担当以外の期間は，師弟の関係を結んでいる信徒からのダーンが収入として非常に重要なものだと考えられる。つまり篤信の信徒は，同時にゴースワーミー師の生活のために欠かせないパトロンであるのではないか。S師の長男A師へのインタビュー（2023年2月15日）では，ゴースワーミー師の収入源として教員，テクニカルジョブ（エンジニア？），個人のビジネスの他にカターが挙がった。

同じ調査時のバーガヴァタ・カターに参加した聴衆数人に筆者が聞き取りをしたところ，これらの人たちは隣接する首都デリーやラージャスターン州から自家用車でヴリンダーヴァンにやってきている年配の女性が多かった。この女性たちの夫の多くは会社経営者や重役の地位にあり，金銭的にも時間的にも余裕のある生活を送っている人物たちであることは明白だった。ある女性からはV師の存在とそのカターを知って以来，初めてカターに参加してからの半年間，毎月2回ずつ参加しているという回答も得られた。つまり，熱心な「ファン」であり，少なくともその参加の回数だけV師へのダーンをしていることになる。

他にも，V師のカターにひとりで参加した（実際には運転手とサーバントを一人ずつ同伴していた）という1981年生まれの男性A氏へのインタビュー（2023年2月17日）からは，どのような人物がゴースワーミー師の弟子となり，深い関係を築いているかが垣間見える。

A氏はインドでもっとも入試の難易度の高いインド工科大学（カーンプル校，IIT-Kanpur）の化学工学専攻を卒業して，現在は冷蔵倉庫の会社を経営している。カース

ト的にはアグルワール Agrwāla の出自である。彼は母の影響で，V 師の兄で同じくラーダーラマン寺院の司祭である S 師の弟子に 10 年前になったという。その理由は「クリシュナが，誰もやって来なかった時に自分を助けてくれた。そうでなければずっと迷っていただろう」からだと言う。

師については，スィッダ・マハートマー（Siddha Mahātmā, 修行を満願させた偉大な魂をもつ人物ほどの意か）であり，クリシュナやハヌマーン神（同じヒンドゥー教ヴィシュヌ派の神格）に近い存在だと話す。

A 氏は今では年に 3, 4 回は S 師に会いに来るという。師と会う場所はどこでもありえるといい，また普段から電話，メール，SNS などの手段で連絡を取っている。彼は師と会ったときには宗教的なこと以外にも自分のキャリアや病気などについてなど，何でも話すという。

そして金銭面では，S 師に毎月 30,000 ルピーを送金しているという。さらにヴリンダーヴァンに来たときは滞在費として，3 日以内なら 1 日辺り 11,000 ルピーを，1 週間の滞在なら 50,000 ルピーを支払うという（2023 年の本稿執筆時 1 ルピーは日本円でおよそ 1.5〜2 円の間を推移）。それだけでなく，師の家で食事をしたときなどは，師の妻そして師の息子 2 人の妻たちにも金銭を渡すという。

もちろん全ての弟子がこの A 氏のように大金を送金しているとは限らず，各々の経済力に応じての金額になると推察される。それでも数十人から数百人もの弟子をもつゴースワーミー師にとって，このような弟子からのダーンが重要な収入となっていることは疑いえない。

3　近年のカターのあり方の変容

近年，特におそらくコロナ禍以降，YouTube や Facebook などインターネットの SNS を通じて，バーガヴァタ・カターをはじめとした多種のカターのライヴ配信などが盛んになっている。ライヴ中継とその録画の両方がある。配信されるものの多くは大規模会場で不特定多数の人々が自由に参加できるタイプのものが多いようだ。それらの録画は，1 日のカターを通常通り数時間にわたって録画したものもあるが，それらを編集してカターの一部を切り取ったわずか数十分程度にしたものも多い。数日間毎日ヒンドゥー教の神話に没入するという従来のカターの方法からは変化しているが，その代わりに日時を選ばず，誰でもカターに触れることが簡単にできるようになった。

カターが重要な収入源でもある語り手は，SNS のチャンネル登録の呼びかけをして閲覧者数を増やそうとしている。YouTube なら配信に挿入される広告による収入もあるだろう。さらに本来語り手に対してカター終了後に直接行うダーンを，ネット上のカ

ターでは銀行振り込みや電子マネー支払いも呼びかけている。ラーダーラマン寺院のゴースワーミー師の中にも，SNS を媒介として非常に熱心に自らの活動について発信をしているＰ師という司祭がいる。Ｐ師はホームページの作成はもちろんのこと，Facebook，X（旧 Twitter），Instagram，YouTube など計 6 つの SNS を利用して活動している[8]。

前述のように，女性のカターの語り手が現れていることも重要な変化で，今後これらがヒンドゥー教社会や文化に与える影響も注目される。

4　おわりに

カターはまず，叙事詩やプラーナというサンスクリット語で書かれたヒンドゥー教古典文献に普段親しまない一般聴衆でも，ブラーフマンによるカターを通じてその詳しい教えにふれることができる機会である。ラーダーラマン寺院のゴースワーミー師によるバーガヴァタ・カターなら特にクリシュナ信仰の聴衆への教化となる。同時に，カターは聴衆にとっては宗教（ヒンドゥー教）的な芸能，ライヴでありエンターテイメントでもある。法話・講話（声の通り具合，語り方の魅力）と音楽（歌，楽器演奏）という，聴衆に直接訴えかけるものが魅力的であれば，それだけその師のカターは評判を呼び人気が出る。その結果，さらに語り手の弟子となる人々，あるいは弟子にはならずとも支援する人々が増えることになる。つまり，カターの語り手（本稿ではラーダーラマン寺院のゴースワーミー師）にとっては，各地に住む自分の弟子との交流の機会でもあり，新たな弟子を増やす機会，そして寺院外からの収入を得るための重要な機会でもある。

ブラーフマン司祭というと寺院内での神像への日々の儀礼職を担う人物という面がまず注目されるわけだが，ヒンドゥー教社会では寺院外でこのようなカターという機会において師と弟子という関係が存在し，司祭の生活を支える重要なものとなっているのである。

一方でカターのあり方が，かつての対面で長時間の催しというものから，不特定多数の人々がインターネットを通して見るものという要素も加わってきていて，これはインド社会におけるマルチメディア化が進む現在，さらに今後進行していくと思われる。

本稿ではバーガヴァタ・カターについて文学及び思想史的な点では検討することができなかったが，これらについては今後の課題としたい。

付記

本稿は JSPS 科研費基盤研究Ⓒ（課題番号 20K00061）「インド・ヴリンダーヴァンのチャイタニヤ派における理論と実践の相互補完的研究」の成果の一部である。

《注》

（1） 宗教と芸能との関わり，特にパフォーマンスという点では演劇が重要である。ヴリンダーヴァンのある北インドの人びとに親しまれているクリシュナ神話劇であるラース・リーラー Lāsa Līlā とラーマ（ラーム）神話劇であるラーム・リーラー Rāma Līlā については，さまざまな視点による多くの研究がなされてきている（例えば，Hawley 1981, 坂田 2009，など）。ラース・リーラーのラースとは「円舞」，リーラ―は「遊戯」の意であるが，クリシュナと牧女（ゴーピー）たちによる歌と踊りを模して演じるものである（古賀・高橋 2006：1150）。坂田貞二は「宗教歌舞劇」（坂田 2009：3-4）としている。劇は男性だけで演じられる。専門の劇団もあり，一座がインド各地を回っている。

（2） カターと類似の語・行事にサットサング satsaṅga がある。古賀・高橋（2006：1306）によれば，この語は「宗教人や信仰の篤い人との交際や法話を聞いたり讃歌を歌ったりする会合」という意もある男性名詞である。

（3） 特にサッティヤナーラーヤナ・ヴラタ・カター satyanārāyaṇa vrata kathā がある。これは，ヴィシュヌ神の異名の一のサッティヤナーラーヤナ神の御利益話，家庭での祈願や祝い事の際に一般にバラモンによって語られたり読誦されたりする（古賀・高橋 2006：1306）。

（4） クリシュナ神話を含む『バーガヴァタ・プラーナ』の内容は，上村の原典からの解説（上村 2003：255-326）と服部正明と大地原豊による原典からの抄訳（服部，大地原 1969：293-330）を参照。

（5） ただし小倉はカターではなく「バジャン」と書いているが，これはおそらく本稿でのカターを指すものと思われる。

（6） これは特異な例だが，ラーダーラマン寺院のゴースワーミー師の S 師は 1993 年から夫妻で演台に座ってカターを行っている，そこでの妻の役割は歌唱である（Case 2000：52, および Hawley 2020：211）。

（7） 海外 15 か国で，インタビューではアメリカ合衆国，イタリア，イギリス，フランス，ドイツ，オーストリア，スイス，ポーランド，スウェーデン，ブラジル，南アフリカ，アルゼンチンとの回答があった。

（8） P 師の HP を参照。https://sripundrik.com/（2023 年 10 月 25 日閲覧）

参考文献

小倉泰　2000 年「解説」，小倉泰，横地優子 訳注『ヒンドゥー教の聖典 2 篇 ── ギータ・ゴーヴィンダ，デーヴィー・マーハートミャ』平凡社

上村勝彦　2003 年『インド神話 ── マハーバーラタの神々』，ちくま学芸文庫

古賀勝郎，高橋明 編　2006 年『ヒンディー語＝日本語辞典』大修館書店

小西正捷，井上貴子　2012 年「語り芸」，辛島昇他監修『新版 南アジアを知る事典』，平凡社，pp. 158-159

坂田貞二　2009 年「クリシュナ神の生涯を再現する歌舞劇ラース・リーラー台本の形成 ── ヒンドゥー教世界における伝統の継承と展開の事例 ──」，『人文・自然・人間科学研究』第 21 号，pp. 1-22

坂田貞二，橋下泰元，田中多佳子，福永正明　1989 年「地上の天界を歩く人々 ── 北インドにおけるクリシュナ信仰と集団巡礼」，『アジア・アフリカ言語文化研究』37 号，pp. 69-121

澤田彰宏　2020 年「ヒンドゥー教のクリシュナ寺院の組織と運営 ── インド・ヴリンダーヴァンのラーダーラマン寺院の事例から ──」，『東洋学研究』57 号，pp. 105-120

田中於菟弥　2012 年「バーガヴァタ・プラーナ」，辛島昇他監修『新版 南アジアを知る事典』

平凡社，p. 598
服部正明，大地原豊 訳注　1969 年「バーガヴァタ・プラーナ」，長尾雅人 責任編集『世界の名著 1　バラモン経典　原始仏典』，中央公論社，pp. 293–330
Case, Margaret H, 2000, *Seeing Krishna, The Religious World of a Brahman Family in Vrindavan,* Delhi, Oxford University Press
Hawley, John Stratton, 1981, At Play with *Krishna : Pilgrimage Dramas from Brindavan,* Princeton, Princeton University Press
_____, 2020, *Krishna's Playground Vrindavan in* 21*st Century,* Delhi, Oxford University Press

（原稿受付　2023 年 10 月 25 日）